

“Care for Caregivers”

看護師のための学びと癒しのセミナーが開かれる

昨年 11 月 29 日、聖マリアンナ医科大学病院看護部が同院を会場に、同院と近隣の医療機関に勤務する看護師を対象として、講演とコンサートの 2 部構成からなるセミナーを主催した。

同セミナーは、“Care for Caregivers”をテーマに、学びと癒しのひとときを提供することを狙いとしたもの。開会にあたり、同院看護部長・陣田泰子氏が「日々、闘病されている患者さんの傍らで医療従事者も厳しい状況に置かれている。そういった中、“Care for Caregivers”というテーマが浮かんできた。北米ではヘルスプロモーションの一環として caregiver のためのケアが積極的に推進されているようだ。このセミナーをどうぞ楽しんでいただきたい」とメッセージを贈った。

第 1 部は、京都府立医科大学臨床検査部助教授・藤田直久氏を招いての講演「院内感染トリビア」。氏は、日本感染症学会認定 ICD そして院内感染対策チームのリーダーとして感染対策を推進する立場から、「手洗い」を中心に講演した。

まず、院内感染の多くは医療者の手が媒介しているとし、「日常の看護業務の際、一過性菌が手に付着するが、皮膚表面の付着菌は流水と石鹸で容易に除去される」と、手洗いの有用性を改めて強調した。そして「感染防止のためには最も重要な手技だが、十分に実施されていない」と指摘した上で、手洗いの実施頻度を下げる因子を挙げた。

氏によれば、単位時間当たりの手洗いの必要回数が 10 回増加するごとに、実施率は 5 % ずつ低下していくことを示すエビデンスが存在するという。

さらに、藤田氏は「最適な手洗い方法を身につけないと、感染率は下がらない」とし、手洗いの種類と効果、最適な手洗い手技を紹介。手荒れへの懸念に対しては、手洗い手技の未熟さと関連しているとし、「速乾性手指消毒剤は、洗浄効果がないため数回使用ごとに手洗いが必要となるが、石鹸より手荒れが少ないという利点がある。また、ハンドクリームは複数人で使用しないという注意も必要だ」と語った。院内感染を抑止するため、医療者各自の手洗いや施設の実情に応じた対策について再考する必要があるようだ。

第 2 部は、癒しをテーマとした「イーハトーヴォコンサート」。作曲家・多和田 吏氏が作編曲した宮澤賢治の理想郷を想起させる美しい旋律を、この日のために結成されたピアノと弦楽による CG 六重奏団が演奏した。元 劇団四季の西村正平氏らによる掛け合いによる朗読を随所に織り込み、『風の又三郎』をはじめとする賢治のリズムと深い思想に満ちた創作世界を演出した。

●本誌編集室

後援：神奈川県看護協会

協賛：住友製薬、NEC、エアウォーター、ピュアナースほか

運営：医学書院／ビー・エス・コミュニケーションズ